

## アジアパシフィックの文脈に受肉下ホーリネス

フロイド・カニングハム博士

アジアパシフィックナザレンセミナー学長

### 序論

1926年、日本で尊敬されている神学者内村鑑三は、アメリカ人がアジア人全般に、特に日本人に神学を教える権利を有することに疑問を呈しました。内村は語ります。「彼らは、実践的なものを教えることができるでしょう。しかし、人類は地上の生活を学ぶためにアメリカに行くのですが、天における生活を生きるためには、他の人々のところに行きます。」<sup>\*1</sup> アメリカ人がこの世的であることは特別な誤りが彼らにあるのではありません。それは彼らの国家人としての性格であり、自分の持つ知識を用いて宗教以外の他の分野に貢献していることも事実です。これが、1926年からどれくらい変化しているかどうかは私にはわかりません。そのことは、私には珍しいことのようにも思えます。というのも私はアジアで自分の半生を過ごしており、天に関する教理、キリスト者のホーリネスについて教えているからです。私は、本日の講演を神学者としての立場からではなく歴史家として語らせていただきたいと思いますが、同時に、現実に役立つものでありたいと思います。一人の歴史家として、私は、神が私たちを時と空間の中を導いておられるという伝統の中を歩んでいます。私たちが立っている伝統というものは、現代の教会に対してだけでなく世に対しても存在するものです。<sup>\*2</sup> 私たちが育てられてきたところには目的と使命が存在するのです。

神さまがそのような教会に教えてくださることは、ホーリネスは受肉化しなければならないということです。これは、第1に、ホーリネスが神の共同体において個々人を束ねるものであるということ。そして第2に、ホーリネスは、さらに広範囲の社会において神の愛が私たちを通して真により広い社会に注がれるという意味で、まわりの苦しみに対してあわれみの気持ちをもって共感するということの意味するものです。

---

\*1 Uchimura, "Can Americans Teach Japanese in Religion?" *Japan Christian Intelligencer* 1 (1926), cited in Andrew Walls, "The American Dimension in the Missionary Movement," in *Earthen Vessels: American Evangelicals and Foreign Missions, 1880-1980*, eds. Joel A. Carpenter and Wilbert R. Shenk (Grand Rapids: Eerdmans, 1990), 1-2. See also Hiroshi Miura, *The Life and Thought of Kanzo Uchimura 1861-1930* (Grand Rapids: Eerdmans, 1996), 74-75.

\*2 See Timothy L. Smith, *Nazarenes and the Wesleyan Mission: Can We Learn from Our History?* (Kansas City: Beacon Hill, 1979).

## I. 共同体に受肉するホーリネス

私はアメリカで育ちましたが、炊かれたお米は、きめの細かい、綿毛のついたようなふわふわした（さらさらの）ものであると思っていました。テレビのコマーシャルにでてくる、サトウのゴハンのようなお米は、くつつくのではなく、すぐにほぐせるように調理されています。お米の粒は他の粒とくつつかないように調理される。これが私がお米に対して想像していたことでした。お米が誕生したすぐ近くの場所であるフィリピンに来て、私は心を入れ替えました。お米は、少し粘り気のあるものでなければいけないのだ。というのも、おはしで食べるのだから。その為には、お米は、集団で存在しなければならず、それぞれのご飯粒は他のお米の粒とくつついて離れないようにしなければならないということに気づいたのです。同様に、アジア・パシフィックの思考方法は、しばしば教えられてきたように個人単位で考えられるべきなのかどうかということです。聖書をもう一度新たに読み直しますと、西洋の個人の強調は、共同体的な視点と共にバランスをもって考えなければならないということがわかります。

アジアおよび西洋におけるポストモダンの傾向は、真実の共同体から人々を移してしまい、インターネット上のオンラインでの接触という架空の共同体に置き換えてしまいました。私たちの人間関係において基本中の基本である人間的な暖かみのある触れあいが欠けているのです。テレビのチャンネル上で行われるオンラインの礼拝なども、そこに人と人との触れあいはない受肉していないものです。個人は孤立し、孤独になっています。また逆に、より大きなネット上のアイデンティティの一部に個人がなっていると迷信的に信じているのです。

初代教会も、同様な異端であるグノーシス主義と闘いました。他の異端の間で、グノーシス主義は、神が真実に受肉するということを信じない異端でした。グノーシス主義者にとって、肉体はすべての物資同様、遺伝的に邪悪なものであったのです。彼らにとって、イエスの父である真実の神ではなく神としてまつられた人（半分神）は、世界と物質の創造者でありました。教会会議は、繰り返し、グノーシス主義に対して、イエスは完全に受肉され、肉体をとられた、全き人であったと訴えたのです。それにもかかわらず、アウグスティヌスは、グノーシス主義の要素をキリスト教の教理にもたらしてしまったのです。イエスが肉をとられたとか子をもうけるという教理は、アウグスティヌスを悩ませます。彼は、どうしたらホーリネスという教理を通常の結婚の関係と一致させることができるかということが理解できなかったのです。

この結果、ローマ・カトリック教会は、独身制度をホーリネスのしるしとして尊重しました。今でさえ、福音派の人々が、イエスが真に神であるという教理よりもイエスが真に人間であるという教理に問題を覚えているのです。私たちと同様に、神の子が、あらゆる側面において試みられたというのは理解したがいものなのです。

受肉したホーリネスという神学は、キリストと共に始まります。私たちの救いは、イレナエウスが教えてくれたように、神の創造のすばらしさとキリストの受肉から開始されるのです。受肉は、神が永遠なるご自身を与えられるということに示されています。神の本質は、己を空しくするということでした。

救いの目標は、墮落を修正し、男と女に救いをもたらすだけでなく、墮落した本性を元の創造された状態へと戻すことにあります。つまり、贖いは、私たちが真に人間であることを可能にするものであり、私たちの最初の創造された本性で汚れている要素を取り去ってくださるのです。

元来、創造された本性において、私たちは交わりを持つように創造されたのです。孤独ではありません。三位一体自体も、神ご自身が交わりの中におられることを示しています。私たち人間にとって神との交わりは根本的です。交わりの中で生きることこそが、私たちが創造された理由であり、神と交わることが元来の本性です。

しかし、神はまた、人間間の交わりの素晴らしさを認めておられました。それは神ご自身が子と聖霊との交わりを喜ばれていたからです。その結果、アダムのためにイブを創造されたのです。共同体や交わりは、人間の本性にとって本質的なものなのです。

共同体は墮落によって破壊されますが、イエス・キリストによる恵みにおいて再び回復されます。それはキリストの贖いにおいて私たちの間にもたらされるのです。共同体が回復される時に、それは、礼典としての役割を果たし、私たちの間にキリストの臨在と恵みを提供してくださるのです。キリストの臨在は、共同体にもたらされ、共同体を通して、共同体は、真実の受肉した、キリストの身体的な顕現をもたらすのです。

ホーリネスのリヴァイバルは、個人主義を賞賛していた啓蒙主義によって影響された文化において起きました。19世紀の賛美歌と説教は、自己に重きをおく思想を反映しています。ホーリネス運動における強調は、共同体への責任についても私たち全ては同等に召されているにも関わらず、共同体的な視点が欠如した個人の全き聖化に強調点がおかれたのです。 私たちの置かれている文脈および聖書は、私たちのホーリネスへの召しが集合的

に受け取られ、受肉するために私たちを召されたのです。私たちの個人のホーリネスは、信仰共同体として、この時と場、この社会で、ホーリネスの民とは何なのかということを考えることなしには、意味をなさないのです。<sup>\*3</sup>

## A. 霊と組織

私たちウェスレアンホーリネスの遺産は、組織に対する強い関心です。もしホーリネスが共同体に受肉するとしたら、聖霊と組織は分離してはならないことを意味しています。同時に、組織は常に聖霊に仕えますが、聖霊は、組織に適合するように、しむけられたり、ならされたりしてはならないのです。教会歴史家のメンデル・テイラーは、「運動それ自体が、神の恵みの自由にあふれだす川を妨げはじめたら、聖霊は、渇いた土地に洪水を起こすほどの別のチャンネルを開きます」<sup>\*4</sup> と語っています。テイラーのポイントは、ホーリネスを標榜する教会は、神の恵みのチャンネルに合わせるように計画されており、テイラーの暗黙の問いは、「それはいつもそうだったでしょうか。いかに私たちは、自分たちの組織が聖霊の働きを妨げないように出来るか」というものでした。

18世紀の英国のメソジズムにおいて、班会や組会という形態の組織は、刷新を行う聖霊と顕著になってきつつあった産業的な文脈によく適合しました。ウェスレーの権威は教理が決定され、説教者が任命され、聖霊の交わりが分かち合われていた年会によって緩和されていたのです。ウェスレーは信徒をよく用いましたが、このことは聖霊が一般の男女を教育し、用いることに機会を開きました。<sup>\*5</sup>小グループも緊密な相互責任を形成しました。メソジストソサエティは、経済的なクラス分けよりも霊的に必要とされるということに基づいた組織に基礎づけられたものだったのです。同様にメソジズムもアメリカにおいて18世紀初頭に非常に成長しました。それは、アメリカの開拓地拡大、小さな町、都市の共同体の拡大にとってもあっていた組織を巡回する形態をとっていたからです。

18世紀後期と19世紀初頭には、フランシス・アズベリーが、説教者を任命しました

---

\*3 See *Embodied Holiness: Toward a Corporate Theology of Spiritual Growth*, eds. Samuel M. Powell and Michael E. Lodahl (Downers Grove, IL: InterVarsity, 1999); J. Ayodeji Adewuya, *Holiness and Community in 2 Corinthians 6:14-7:1: Paul's View of Communal Holiness in the Corinthian Correspondence* (New York: Peter Lang, 2001). See also Stanley Hauerwas, *Sancify Them in the Truth: Holiness Exemplified* (Nashville: Abingdon, 1998), Part II.

\*4 Mendell Taylor, *Exploring Evangelism* (Kansas City: Beacon Hill Press, 1964), 7. See also Howard A. Snyder, *The Problem of Wineskins: Church Structure in a Technological Age* (Downers Grove, IL: Inter-Varsity Press, 1975).

\*5 David Lowes Watson, *The Early Methodist Class Meeting*, revised edition (Nashville: Discipleship Resources, 1987); Richard P. Heitzenrater, *Wesley and the People Called Methodists* (Nashville: Abingdon, 1995).

が、独身者を巡回区に任命しました。ほとんど誰も彼の権威を疑問視しなかったのです。しかし、それは、アメリカの人々のキリスト教化の主要な要因の1つでした。年会等の会議も、聖霊の目的を成就するのに大いに役立ちました。19世紀後期には、キャンプ集会、各個教会でのリヴァイヴァルは、聖霊の降り注ぎがあちこちであったのです。<sup>\*6</sup> 北アメリカで起こった様々な場面では、聖化の過程の瞬間的で転機的情況をうみだすジョン・ウェスレーの全き聖化の強調をかなり土着化させましたが、それは、ホーリネスの基本的なメッセージを変えることなく多くのアメリカ人たちに届いたのです。

メソジスト教会が貧しい人々（豊かな人）にもホーリネスの説教をし続けるのには無理でないかと考えるほど、大きく、世界中にひろまっていったように見えた時、キャンプ集会の連盟を含む超教派の組織形成がおこってきたのです。この国家的キャンプ集会の連盟は、伝道者を任命し、機関誌を出版、集会を指導し、地域間の組織と各地のホーリネスキャンプ集会を生み出しました。この目的は、教会と指導者、北アメリカからきたメソジスト監督教会の牧者たちを教派の忠誠を強調しながら刷新することでした。彼らは癒しや、前千年紀説という終末論を強調しすぎる人々の参加を禁止しました。<sup>\*7</sup>

それにもかかわらずホーリネスへの反対がメソジズムの指導者たちから起こってきましたが、それは、ホーリネス運動によってつくられた教派の組織を混乱させるものでした。特に南部の監督たちは、1894年に不規則な巡回伝道を禁じたのです。

メソジストの神学者たちは、意識的にジョン・ウェスレーから離れて、全き聖化の第2の転機という考えにも反対しはじめました。監督は全き聖化の恵みを証ししない牧師や、組会を放棄した牧師、第2の転機的な経験としての証しを禁止した牧師、ホーリネスの中を成長していく過程で十分であり、それが求められていることだとした牧師たちに按手札を施したのです。<sup>\*8</sup> 信徒は、富と社会的に上位に立つことを嗜好しました。メソジストの学校ではホーリネスの明快な教えが欠けていました。ホーリネスの民が、より歴史のある教派ではリヴァイヴァルは来ないということを認識した時に、古い教派から離脱し、自分自身の組織を形成することについて議論しはじめました。多くは自分たちの教派に留まり

---

\*6 John H. Wigger, *Taking Heaven by Storm: Methodism and the Rise of Popular Christianity in America* (New York: Oxford U. Press, 1998); Wigger, *American Saint: Francis Asbury and the Methodists* (New York: Oxford U. Press, 2009).

\*7 *Echoes of the General Holiness Assembly*, Chicago May 3-13, 1901, ed. S. B. Shaw (Reprint, New York: Garland, 1984), 274-275. See Melvin Dieter, *The Holiness Revival of the Nineteenth Century*, second ed. (Lanham, MD: Scarecrow, 1996), especially chapters 6-7.

\*8 Dieter, *The Holiness Revival*, 250-255; Timothy L. Smith, *Nazarenes and the Wesleyan Mission: Can We Learn from Our History?* (Kansas City: Beacon Hill, 1979).

ましたが、ある人々は去っていったのです。1880年代に出て行った人々は信条や聖書は持っていましたが規則も、教会員制度もありませんでした。彼らは（クリスチャンは、教派からでて、真実な神の教会に加わるべきである）として、ホーリネスと一致を強調しました。彼らは大人だけに洗礼を全身礼という方法で授けました。ある人々は、礼典として足を洗う儀式を採用しました。<sup>\*9</sup>

皮肉にも、全き愛を強調する教理と経験から教会内の分離がおこったのです。しかし、それはホーリネスの民が真実に回心した信仰者と聖霊に満たされた牧者のいる教会の一部でありたいという願いからきたものであり、そこでは、すべての罪から清められたと自由に証しをすることができるための分離でした。彼らは監督によって権利を侵されたと感じました。また彼らは、教会とその綱領に対する忠誠の方が、キリストに対する忠誠よりもより強調されていると感じたのです。そこからわき出す全き愛は、都市の貧しい人々、豊かな人々へと彼らを送り出しました。この人たちこそ、古い教会によって見過ごされていると考えたのです。彼らは、教会は、一般の民衆のために質素な生活をすべきだと考えていました。<sup>\*10</sup> 形式主義や典礼に対してよりも、礼拝と賛美のより福音的な様式を好んだのです。そして信仰の中で子どもたちが育成されるように学校を設立しました。ホーリネスの組織、宣教局、教会は、ダイナミックな運動団体になりました。ホーリネス運動のよく知られた目的は、説教や、この世において正しく生きることを通して「キリスト教をキリスト教化する」ことでありました。それは聖霊を通してすべての人が得ることができる力強く、今起こっている恵みを模範となし、宣教に邁進することでした。ホーリネス運動は、人間学者ルター・ゲルラッハ及び、ヴァージニア・ハイネの定義によれば「理念的に動機づけられ、個人的、社会的な変化の形態を発生させる目的に貢献している人々の集団を意味し、その影響は、それが創立された中における設立された秩序に対立して広がっていく」ものであると語っています。<sup>\*11</sup>

ホーリネスの民にとって、その目的は、全き聖化を自由に、妨げられることなく語ること

---

<sup>\*9</sup> Edward LeRoy Long, Jr., *Patterns of Polity: Varieties of Church Governance* (Cleveland: Pilgrim Press, 2001), gives a general picture, and for specific instances compare, for instance, Howard A. Snyder, *Populist Saints: B. T. and Ellen Roberts and the First Free Methodists* (Grand Rapids: Eerdmans, 2006), and Barry Callen, “Daniel Warner: Joining Holiness and All Truth,” *Wesleyan Theological Journal* 30 (Spring 1995), 92-110, and Callen, *Radical Christianity: The Believers Church Tradition in Christianity's History and Future* (Nappanee, IN: Evangel Publishing, 1999). See also Miura, *Life and Thought of Kanzo Uchimura*, 98-103, 105-110.

<sup>\*10</sup> Dieter, *The Holiness Revival*, 201-205.

<sup>\*11</sup> Luther Gerlach and Virginia Hine, *People, Power, Change: Movements of Social Transformation* (Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1970), xvi.

であり、それは個人と社会の刷新に効果的であると考えていました。彼らが対立する「前もって設立された秩序」は、文化的な抑制というよりも、古い教派によって彼らの上に置かれた拘束であったと言えます。

様々な創立者の希望は、組織を分離して設立することによって、ホーリネス運動は強みを得、その特徴的なメッセージがより効率的に保持され、宣教されるというものでした。1890年代になると、ホーリネスの民は、古い教派から分離していきます。ある人々は教会政治において、監督制、会衆制、長老制が混じり合うような中庸をとる試みをしました。どの場合でも、「栄光ある教会」と、聖霊に満ちあふれた生活の受肉という大志を持つ浸透性のあるぶどうの皮でありたいと願いました。

会員は、誕生したかどうかとか、カテキズムをマスターしているかではなく、回心したかどうかによって決められていました。その意味でいうと、ホーリネス連盟と教会は、初期のアナバプテストの教会のようであると言えます。会員が全員救われることを期待されているのですから、牧者は、ホーリネスに至るだけでなく、明確な全き聖化の経験を持つことが期待されるようになりました。そのような組織は確かに、神の恵みの楽観主義と個人の生活において悪に打ち勝つという社会的な証しを表明するものでした。彼らは、社会的な罪に反対する活動、たとえば、売春防止、アルコール中毒に対する闘いを展開しました。彼らは、聖霊によって導かれることにとっても敏感な信仰者の群でした。それは彼らが去った教会にはなかったものです。旧い教会では、教会の重厚な構造が自由を抑制し聖霊の働きの妨げとなっていると考えました。<sup>\*12</sup>

同様に、日本でも「組織化された」ホーリネスの形態、形式が1890年代に、これらの要素を表明しました。アングリカン教会の宣教団体のバークレー・バックストーンが、明確な全き聖化の教えを説き始めました。1903年にはじまった日本伝道隊は、バックストンの努力によってホーリネスのメッセージを深めました。彼らは聖会や大会を持ち、メソジストや英国教会の人々を引きつけたのです。伝道の同様な形態は、中国においても20世紀に至るまでいい影響をもたらしました。<sup>\*13</sup>救世軍は、明確なホーリネスのメッセージを携えて1895年に働きを開始しました。救世軍は幸いにも、この恵みに応答する為

---

\*12 For example, see E. M. Isaac in *Herald of Holiness*, April 17, 1912, 5; Phineas Bresee, "Organized Holiness," *Herald of Holiness*, April 17, 1912, 5; [B. F. Haynes], Editorial, *Herald of Holiness*, May 1, 1912, 1, and various articles in the same issue.

\*13 Paget Wilkes, *Missionary Joys in Japan, or Leaves from My Journal* (London: Morgan and Scott, 1913), 35, 86, 97, 111-112, 193; Otis Cary, *A History of Christianity in Japan: Roman Catholic, Greek Orthodox, and Protestant Missions*, 2 vols. (Reprint, Rutland, VT: Charles E. Tuttle, 1976), 2: 344. On China see Leslie T. Lyall, *John Sung* (London: China Inland Mission, 1954); Andrew Gih, *Into God's Family*, revised edition (London: Marshall, Morgan and Scott, 1955), and Lian Xi, *Redeemed by Fire: The Rise of Popular Christianity in Modern China* (New Haven: Yale U. Press, 2010), 131-154.

に、また社会の状況に対してすべての人に対する恵みの楽観主義と信仰者の応答を合体させたのです。

山室軍平師は日本において救世軍を1896年に開始し、即座に全き聖化を求めはじめたのです。彼は1896年に全き愛の賜物を受け、ただちに、彼の生涯において社会的なきよめと日本における救世軍にとって原動力となっていたのです。山室師は、多数の本を遺され、また翻訳家でもあられました。その中にはサムエル・ローガン・ベンゲルの「ホーリネスへの手助け」、1899年に出版された山室師自身の「平民の福音」は日本においてデボーシヨンの古典となりました。賀川豊彦も、山室師を自分の模範として引用されたのです。<sup>\*14</sup>

1899年にF・L・シュメルザーが、アメリカにおいて20世紀への橋渡しの時代にアメリカ中にひろまった多くのホーリネス連盟の1つであるアイオワ州、タボールに本部を持つヘプティバ信仰宣教教会から派遣されました。これらの連盟は、宣教師を信仰によって送り出すことに専念していました。シュメルザーは、横浜で働きました。ヘプティバ連盟と接触のあったシカゴメソジストのチャールズ・コーマンとレティー・コーマンも1901年に日本に到着しました。<sup>\*15</sup>日本人の牧師であった中田重治師は、ムーディバイブル学校の大会に出席している時にA・M・ヒルの説教と教えを聞きました。日本に戻るに際して、中田師はコーマンの働きに加わったのです。チャールズ・コーマンはマーティン・クナップ、セツ・リー、チャールズ・ストーカーによって按手を受けました。クナップの使徒的ホーリネス連盟（1922年にピルグリムホーリネス教会の構成要素になった）は当初は、コーマンの働きを支えたのでした。1910年に、コーマンは東洋宣教教会を設立しました。彼らの最初の働きは東京を中心としたものであり、それからすぐに、ホーリネス聖書学校が栄えたのです。1911年の代表団によるツアーにおいてコーマンをカリフォルニアの様々なホーリネス教会の間に支持を願い、立ち上げたのです。東洋宣教教会の日本における働きは1917年にホーリネス教団として組織化されました。教会は数十年にわたり、東京において日曜日の午後にはホーリネスの集会をもち続けたのです。<sup>\*16</sup> 東洋宣教教会は当時かなり主流であったメソジズムと救世軍の千年期後再臨説から離れ、神の恵みの顕著な働きとして癒しの教理を唱えました。この点においてコーマンは一時長老教会にいた、クリスチャン連盟、アライアンスの創始者であるA・B・シンプソンによって直接的な影響を受けました。シンプソンの説教は、四重の福音、義認、聖化、千年期前再臨説、神癒を保持していたのです。<sup>\*17</sup> この説教形式は、多くのアジアにおけるホーリネ

---

\*14 R. David Rightmire, *Salvationist Samurai: Gunpei Yamamuro and the Rise of the Salvation Army in Japan* (Lanham, MD: Scarecrow Press, 1997), 13, 37-41, 56-59.

\*15 Paul W. Worcester, *The Master Key: They Story of the Hephzibah Faith Missionary Association* (Kansas City: Nazarene Publishing House, 1966), 38. The Hephzibah association joined the Church of the Nazarene in 1950. See Floyd Cunningham et al, *Our Watchword and Song: The Centennial History of the Church of the Nazarene* (Kansas City: Nazarene Publishing House, 2009), 403.

\*16 *Holiness Banner* 1 (November 1899), 1; Lettie Cowman, *Charles E. Cowman: Missionary, Warrior* (Los Angeles: Oriental Missionary Society, [1928]), 89, 114, 130; Robert D. Wood, *In These Mortal Hands: The Story of the Oriental Missionary Society: The First Fifty Years* (Greenwood, IN: OMS, 1983), 67, 70, 102-103, 181; John J. Merwin, "The Oriental Missionary Society Holiness Church in Japan, 1901-1983," Doctor of Missiology thesis, Fuller Theological Seminary, 1983, 105; Edwin W. Kilbourne, *Bridge Across the Century*, vol. 1: *Japan, Korea, China* (Greenwood, IN: OMS, 2001).

\*17 Lettie Cowman, *Charles E. Cowman: Missionary, Warrior* (Los Angeles: Oriental Missionary Society, 1928), chapter 19, "What Charles Cowman Believed," 231-247.



ス教会に結果的に影響を与えました。ドナルド・デイトンは、この四重の福音は、アーム・ゼンブル・マクファーソンのようなペンテコステ派の福音である「フォースクエア―四変型（四つの広場）」になりうるということを議論しています。「聖霊によるバプテスマ」は、異言を意味し、これがウェスレーの強調である聖化する恵みの現れとしての心のきよさや全き愛を置き換えるものとなりました。<sup>\*18</sup> 同様に、新約時代の原初の教会に戻りたいという願いから、テキサス州、アーカンサス州に拠点を持つ新約キリスト教会も1905年に日本に宣教師を送りました。ルル・ウィリアムスとリリアン・プール師は信仰をもって冒険にのりだし、コーマンと連携をとりました。彼女らは東京に留まり、1907年まで到着以来、スラム街で働いていました。そこで日曜学校を作りました。<sup>\*19</sup> 1908年に女性家庭教会が形成されつつあったナザレン教会に加入した時、彼女らと日曜学校もナザレン教団の一部となったのです。ヘプティバ信仰宣教団とキリストホーリネス教会は、主にアメリカの地方都市で活躍していたのですが、その宣教師たち、他のホーリネス連盟はボストン、カルカッタ、東京という都市で働きを開始したのです。

100年前のホーリネス連盟は、新約聖書時代のキリスト教に戻るか回復したいという望みを抱いた人々によって構成されていました。彼らは教会指導者がいばりちらしていることに怒りを感じ、キリストのみが教会の頭であることを主張しました。多くは、各個教会の会衆の自治を好みました。この形態から形成された教会は、監督の役割に制限を加えたのです。<sup>\*20</sup> ある人々は、アメリカ南部の「キリストの教会」のように、初期の回復主義者（初代教会に倣いより純粋な形式の宗教をめざす立場）でした。他の「キリストの教会」とは違い、彼らは、ホーリネスの教えは、新約時代の教会にこそ明確に深く埋め込まれているという立場を保持していいました。ペンテコステ派はこの初代教会主義を別の方向に用いました。それは癒しや異言のように新約時代において述べられている賜物に戻るという方向性でした。

ホーリネスの民は、本質的な事柄以下についてはどっちつかずの状態がしばしば続いています。固く結ばれたホーリネスの信仰者は一つの集団になり、二世代の内に、そのように比喩的な表現を使用しなければ、教派間の結婚により文字通り血縁集団となっていくのです。それは内部に強みをもたらしましたが、外部への伝道を薄めることになったのです。もし家族や集団が人々とのつながりをもっているのであれば慰めや信頼がおこるでしょう。しかし、もし外部の者が教会の会員と結婚しない限り、教会に入りにくくなるならば、

---

<sup>\*18</sup> Donald Dayton, *Theological Roots of Pentecostalism* (Grand Rapids: Francis Asbury Press of Zondervan, 1987); Choi, Meesaeng Lee, *The Rise of the Korea Holiness Church in Relation to the American Holiness Movement: Wesley's "Scriptural Holiness" and the "Fourfold Gospel"* (Lanham, MD: Scarecrow, 2008). See also Edith Blumhofer, *Aimee Semple McPherson: Everybody's Sister* (Grand Rapids: Eerdmans, 1993), who doubts the direct influence of Simpson over McPherson, 191, and Nancy A. Hardesty, *Faith Cure: Divine Healing in the Holiness and Pentecostal Movements* (Peabody, MA: Hendrickson, 2003).

<sup>\*19</sup> See Timothy L. Smith, *Called Unto Holiness: The Story of the Nazarenes: The Formative Years* (Kansas City: Nazarene Publishing House, 1962), chapter 2; Norris Magnuson, *Salvation in the Slums: Evangelical Social Work, 1865-1920* (Metuchen, NJ: Scarecrow, 1977); Dieter, *The Holiness Revival*; and Cunningham, *Holiness Abroad*, 57-59. See also the recent work of Benjamin L. Hartley, *Evangelicals at a Crossroads: Revivalism and Social Reform in Boston, 1860-1910* (Durham, NH: University of New Hampshire Press, 2011). See Floyd Cunningham, *Holiness Abroad: Nazarene Missions in Asia* (Lanham, MD: Scarecrow, 2003), 9-11, 96-97.

<sup>\*20</sup> See Richard T. Hughes, ed., *The American Quest for the Primitive Church* (Urbana: U. of Illinois Press, 1988), Grant Wacker, *Heaven Below: Early Pentecostals and American Culture* (Cambridge, MA: Harvard U. Press, 2001). See also Theodore D. Bozeman, *To Live Ancient Lives: The Primitivist Dimension in Puritanism* (Chapel Hill: U. of North Carolina Press, 1988).

成長の唯一の手段は、親戚を増やし、子どもを増やすしかありません。しかしこれは、私たちが生きる社会に対して決して十分な橋渡しではないと考えます。<sup>\*21</sup>

ウェスレーから学ぶ者は、均衡のとれた中庸主義に戻ることができるでしょう。それは、一方で形式主義を避け、他方で熱狂主義を避けるものです。しかし、ウェスレーの後の世代はそのどちらかの方向だけに比重をかけてしまいました。そしてホーリネス運動は、この均衡をだいなしにしてきた罪責を分かち合わなければならないと思います。今日ホーリネス運動に携わる者は、一方でメソジストに、他方でペンテコステ派の間のどこかに位置していると思われる。多くのホーリネスの先祖は、メソジズムから派生したものであり、彼らの孫の何人かは、ペンテコステ側に移ってしまいました。またホーリネス運動は、儀式主義と感情主義の間にも位置しています。それは礼拝様式だけでなく、まさにその神学自体においてもです。ウェスレーは自分の神学を正しい方向に導くために、理性と経験を引用し、それを聖書によって検証しました。ウェスレー主義は、教会らしいこととセクト主義の中間に位置します。それと同時に、運動のダイナミクスを維持したいのです。

教会内の教会として、ウェスレーはキリスト教をキリスト教化することを模索しました。しかし、同時にホーリネスの支持者は世に積極的にかかわり、勝利をもって世に向かっていき、世の一部とはならず、世の価値観や物質主義に取り囲まれるのではなく、そのようにすることを模索したのです。ホーリネスの献身的な民は、世に浸透していく為に世とは分離するのです。メソジストのようにウェスレアンは、組織と形式が必要です。ペンテコステ派のように霊的な注ぎと聖霊における自由を熱望します。ウェスレアンは、受肉はしますが、神の霊を制限してしまう形式や構造を常に突き破ることができる人物が必要だったのです。

ウェスレアンは、言葉と霊の両方を求めます。ウェスレーにとって、すべての神性である、父、子、聖霊は、救いのどの段階にも含まれたものであり、罪に気づき回心に至らせ、聖化されてから栄化に至るまで必要なものです。ウェスレーは、キリストのような外側の実とキリストの変容の恵みに対する聖霊の内的証しを信じていました。

素晴らしい理想主義が、ホーリネスの組織を強化してきました。神の霊の動きそのものは、本当に組織化できるのでしょうか。もしメソジストの組織が聖化の恵みの通り道の中にとどまることができないとするならば、この新しいつながりにとって、彼らが世における聖霊の宣教に対して開放的であり続けられるために、何がそのことを可能にするのでしょうか。ホーリネスの組織と教会は、多くのことを切望しすぎたのでしょうか。19世紀後半および20世紀初頭に加入してきた組織は、様々な監督制の異なった形態を試みしました。組織は聖霊を受肉させることができるのでしょうか。<sup>\*22</sup> 私たちはこれに対して疑問を抱くようにと教えられてきました。これに関しては、私たちは冷笑してきました。もし私たちが組織上の悪について語ろうとするならば、組織的なホーリネスについても急進的でなければなりません。ラインホルト・ニーバーは個人や社会が救われることをあまり信じていませんでした。ニーバーは、社会組織は、罪深さの度合いを増すのみであると語る

---

<sup>\*21</sup> Compare the comments of a Japanese observer of American politics in the early twentieth century, who assumed that American political parties were made up of clan relations because his own country's history could be described in just such ways. Hilary Conroy, *The Japanese Seizure of Korea 1868-1910: A Study of Realism and Idealism in International Relations* (Philadelphia: U. of Pennsylvania Press, 1960), 407.

<sup>\*22</sup> Floyd Cunningham et al, *Our Watchword and Song*, chapter 8, "The Spirit and Structure of the Church," 195-231, part of which tells the story of the departure of Seth Rees and the effects of this schism upon the Nazarene mission in Japan.

のです。

しかしキリスト者の完全は、人間や社会の状態のそのような新正統主義の描写に同意したことはありません。ウェスレアンは神が私たちを全く救ってくださり、個人として全くきよめてくださることを必ずなしてくださると信じているからです。もし教会が教会であることができるならば、その集合体と器官のないのちにおいて神の像をそのからだに反映しているような教会を期待します。ホーリネスは、どのような声明や戦略においても、交わりとつながりの中にしみこんでいることを信じているのです。私たちはどうしたら全き愛を組織に関連づけることができるのでしょうか。<sup>\*23</sup>

## B. ホーリネスと共同体

ホーリネスは、孤立するようには意図されていません。イエスと共にひとりだけで歩むという「イエスと私のみ」という信仰は、ホーリネスとは対立するものです。他者に対して無責任な人々は、全き愛で満たされなければならないのです。自分自身だけにしか関心のない人は、たとえ天国に至ったとしても自己中心で、自分本位です。社会的な、共同体的な救いではなく個人的な救いのみで私たちが満足するように導くのは独善的です。私は、アジアや太平洋地区で一人だけ島に住んでいるようにはなるべきはありませんし、そうではありませんでした。私の救いは家族や私の属する団体、民族、私にかかわりある人々と離れては考えることはできないのです。長期間宣教師であるネビー・バートルという宣教師は、「西洋社会の極度の個人主義のために、ホーリネスは内面で、個人的で、かなりの範囲で私的なものと考えられてきた」と語っています。<sup>\*24</sup> 世から分離するという概念もまた、個人のホーリネスを孤立化させてきました。このモデルは、聖書にも、アジア、環太平洋の文化にもありません。バートルは「私たちが神の子とされたという意味を考えるよりも、より集合的な意味で神の民としての社会的意味合いを考える必要があります」と語っています。聖書は、個人的なクリスチャンとしての召しと信仰生活の間には深いつながりがあることを支持していますが、これを私たちはあまりしようとはしません。神が私たちを贖われる時、神は共同体の中で、共同体を通してなして下さり、同体の中に私たちを置いてくださいます。私たちは孤独ではないのです。神は三位一体の神として私たちを救われます。主の中にすでに本質的な関連性と人格間の交わりがあるのです。<sup>\*25</sup>

---

<sup>\*23</sup> Donald Meyer, *The Protestant Search for Political Realism, 1919-1941* (Berkeley: U. of California Press, 1960), ch. 9.

<sup>\*24</sup> Neville Bartle, "Culture and the Beauty of Holiness: Reflections from the South Pacific," in *The Challenge of Culture: Articulating and Proclaiming the Wesleyan-Holiness Message in the Asia Pacific Region: Papers Presented at the Asia-Pacific Region 2001 Theology Conference*, ed. David Ackerman (Taytay, Rizal, Philippines: Asia-Pacific Nazarene Theological Seminary, 2002), 106.

<sup>\*25</sup> See David McEwan, "Being Holy is Being Christlike: To What Extent is this a Definable and Useful Model in an Australian Context?" in *The Challenge of Culture*, 65-82, especially 77-79.

聖書は、私たちがしばしば行うように、体、魂、霊という峻別はしません。靈感により記されたものとして、聖書はヘブライの心理学である、体、魂、霊は分離できないという思想に負っているのです。私たちの問題の一つは、全体に関心を示さずに人間の生活の一部のみを主張することです。19世紀においては、社会的な慈善活動と同時に個人的な伝統との自然的ななりゆきの統合がありました。これがホーリネスの民も含めた福音派にも、1920年代の現代主義者と根本主義者の議論の際起こりました。メソジストは社会的な関心を強調する傾向がありますが、私たちは、個人的な完全を強調してきました。<sup>\*26</sup>

それにもかかわらず、ホーリネスの民のように個人の回心を強調しつつ、霊的な必要と同時に物質的、肉体的な必要にも気を配ってきたのです。日本において1920年に救世軍は牢獄からでた人、年少者の抑圧された人々、労働者、子どもたち、療養所のための家を設立したのです。また刑務所の働きをなし、以前売春婦だった人々への救済機関を持ちました。実に売春の軽減は救世軍の主要な強調点でありました。同様に19世紀後半の女性キリスト者の禁酒禁煙連盟とホーリネス連盟にも同様の働きをするようになっていくのです。<sup>\*27</sup>

ホーリネスが受肉するというのは、他者の物質的必要に対してあわれみの心をもってだけでなく、体としての教会は、御霊の実としてのあわれみと義の業をもって生きていくのです。ホーリネスの共同体からあふれるものとして、私たちはあわれみ、愛、平安、喜び、赦しというキリストの霊の働きを確かめたいと願います。私たちのホーリネスは共同体に受肉したホーリネスでなければなりません。

私たちは、創造、受肉、救いの理解を標榜しているのですから受肉したホーリネスを説教しなければなりません。私たちは、神ご自身が、御言葉を通して世界を創造され、世界をより劣った存在に委ねられなかったのです。創造はすばらしいことです。

それは、実際に贖うことができるものでした。イエスさまは完全に受肉され、人の姿を

---

<sup>\*26</sup> David O. Moberg, *The Great Reversal: Evangelism and Social Concern* (Philadelphia: J.B. Lippincott, 1972); Jean Miller Schmidt, "Reexamining the Public/Private Split: Reforming the Continent and Spreading Scriptural Holiness," in *Rethinking Methodist History: A Bicentennial Historical Consultation*, eds. Russell E. Richey and Kenneth Rowe (Nashville: Kingswood, 1985), 75-80.

<sup>\*27</sup> R. David Rightmire, *Salvationist Samurai: Gunpei Yamamuro and the Rise of the Salvation Army in Japan* (Lanham, MD: Scarecrow, 1997), 50, 69-87; and Mikiso Hane, *Peasants, Rebels and Outcasts: The Underside of Modern Japan* (New York: Pantheon, 1982), 213-224. See also Ruth Bordin, *Frances Willard: A Biography* (Chapel Hill: U. of North Carolina Press, 1986), 129-154; Stan Ingersol, ed., *To Rescue the Perishing, To Care for the Dying: Historical Sources and Documents on Compassionate Ministries Drawn from the Inventories of the Nazarene Archives*, second ed. (Kansas City: Nazarene Archives, 1998); Rodney L. Reed, *Holy with Integrity: The Unity of Personal and Social Ethics in the Holiness Movement, 1880-1910* (Salem, OH: Schmul, 2003), 93, 201-202.

とられました。幻ではありません。皆様と私と同じからだをとられたのです。どの点においても私たち同様試みを受けられましたが、罪は犯されませんでした。つまり、彼の肉体はホーリネスにとって何の障害でもなかったのです。私たちは全き福音を語ります。完全にきよめられ、私たちのすべての霊、魂、体は主イエス・キリストの到来においても咎めなく保たれます。

私たちはヘブライの人々や初代教会の間で、集合的な受肉の感覚があったことを見ることができます。アジア、環太平洋の文脈においてホーリネスを語るができるテキストはエゼキエル36章です。それは、心のきよめをもたらす主要な要素としてアジア、環太平洋の文化にある恥を語るからです。私たちが共同体的に告白する主の名を恥じないように、私たちは個人的に一つの体の個々の会員として、私たちはからだそれ自体において、私たちのまわりの者と同じように生きるべきではありません。私たちは、いかに自分たちの生を生きるかによって、神に恥よりも栄光とほまれを与えなければならないのです。

私たちが集合的に保持している名前に栄光をもたらすことができる唯一の方法は、聖霊によってきよめられることです。石の心が肉の心によって代わられ、その中に規範を書き添えていただくことです。主の体の一部として、このきよめを求めることが私たちの責務です。私たちは、あたかも高位の聖職者が人々に外的な罪から清めるの為に水をふり注ぐように、聖霊が私たち全体に降り注がれるように希望し、祈りたいと思います。37章では神の霊が渴いた骨に吹き込まれる場面が展開されます<sup>\*28</sup>

コリントの教会は、民族的、宗教的な背景には関心を払わず、神のすべての人への救いの恵みを証ししています。コリントでは受肉したホーリネスは、偶像にささげられた肉との関連で問題となりました。教会の中で、神学的には正しくても、道徳的に間違っていることもあるのです。異端からの回心者は、兄弟によって傷つけられてしまいました。偶像にささげられた肉は彼らの古い生活様式や神殿での礼拝を思い出させるものだったので、彼らはすでにそのような生活をやめていたのです。何人かのクリスチャンの回心者はそのような偏見はなく、偶像にささげられた肉を無制限に食していいということを主張したのです。すべてのものはよいことのために創造されていると彼らはきちんと議論しました。食物が私たちの神との関係を変えることは、いずれにせよありません。自分たちは偶像にささげられた肉をどのようにするか、正しい神学を見出し、それを実行しようという

---

\*28 Compare Jason Hallig, "Communicating Holiness to the Filipinos: Challenges and Needs: The Path to a Filipino Theology of Holiness," in *The Challenge of Culture*, 84-86.

のが彼らの考え方でした。彼らは知恵ではじめ、行動を決定し、それによって倫理を行おうとしました。それは誤った出発点でした。パウロは、それは高慢と傲慢に基づいている（4章19節）と語っています。肉を食した人々は神学的、宗教的理解においては正しかったのです。頭の中では正しいのですが、実際に行った行動は間違っていたのです。

肉を食することは、神学的には反道徳的な状況でした。それは、パウロが他の教会においても説いた大きなキリスト論的な問題でもなかったのです。肉を食すること（食べないこと）は、本質の一つではありません。戦うべき事柄は他にもあります。このことでは戦うべきではなかったのです。この愛についての自由の有無を言わせぬ使用は、間違っていたのです。肉を食することは、個人の関係を破綻させるということで不道徳になりました。真実の知識は誇ることはありません。真実の知識は、自分がいかに足りないものであるかを悟ります。ホーリネスは他者のために生きる道です。もし私が肉を食することが仲間のクリスチャンとの関係を妨げるならば、8章13節にあるようにそれを食べないのです。私が行うことは、霊的に私を養ってくれるキリスト教共同体への愛と必要に基づいて行われるべきなのです。私にも道徳的にいかにふるまったらいいのか教えてくれるキリストの名において洗礼を受けた共同体が必要です。私自身だけでは、神が求められる道を決定できません。理性的に判断しようと考えすぎてしまいます。共同体のために、私は自分の権利を服従させなければなりません。この文章についてある注釈者が自由について書いています。「自由は、人間関の拘束から自由になることではない。」と。<sup>\*29</sup>

・ コリントの教会の偶像にそなえられた肉を食するエピソードは神の民として共に生きることに語っているのです。謙虚に、やさしく、忍耐強く、共にたえながら歩むのです。ホーリネスは、霊の一致を保つことを平和のきずなで結ばれて努力することです。ホーリネスは一つの霊によって一つのからだであるということです。ホーリネスは一つの希望、一人の主、一つの信仰、一つの洗礼、私たちすべてを結び、私たちを離れ難く結びつける私たちの父である一人の神を信じることです。私たち以上に世は、キリストを必要としています。私たちの目的は、愛によって建てられるということです。パウロはホーリネスの倫理を知識ではなく、コリントの人たちが見過ごした愛の上に基礎を置くのです。

ちょうど、そのように、パウロはローマの兄弟、姉妹に、霊的な礼拝である自分の体を生きた犠牲としてささげるように勧めるのです。ローマ12章1-2節は、順応とは対照

---

\*29 Compare Jason Hallig, "Communicating Holiness to the Filipinos: Challenges and Needs: The Path to a Filipino Theology of Holiness," in *The Challenge of Culture*, 84-86.

的に変容について語ります。私たちは、自分たちを取り囲んでいる偶像に従ってはいけません。順応するのではなく、パウロ時代においては、皇帝や神々を崇拜したりするのではないのです。当時、それに従わないということは死さえも意味したのです。

順応は多くの人に安楽な気持ちもたらしめます。目標は他の人が何をなしているか、何を語っているか、何を購入しているか、何を着ようとしているのか、それを考え、自分も同様に行うことです。フィリピンのバリオという地区では、男性であるということは、他の人と同じように飲み、ギャンブルや、トランプや、闘鶏、他人の妻と浮気をすることを意味します。

異なったことを行うこと、突出していると、同じさやの下にいるということをしなないということに叱責されたり、妻に頭が上がらないことなどを引き起こします。この場合、家庭にとって責任ある行動とは、ある基準に対して迎合していないということです。それには変容、心を全く変えること、きつい圧力に屈しないこと、世に対してはっきりと否ということことです。

それには、世の意見がどのようなものであれ、神を第1とする決定的で勇敢な行動が必要です。これに加えて、変容した人物は同様に変容した人々の共同体に自分を置くのです。

一見したところ、西洋人は、順応しないことは得意分野です。彼らはぼくとつなカーボーイのような個人主義者であることが無理なくできます。西洋人のホーリネスの見解の問題性は、多くの時間、彼らがローマ12章2節をこえて、その章の残りの部分を読まないということです。パウロが「あなたの体をささげなさい」という時、彼は教会の共同体的な従順を嘆願しているのです。体というものは、複数形で書かれています。共同体は、個人とは違い、変容されるべき生きたささげもの(単数)なのです。私たちはこの集合的な文化に対抗的な集合体に参加するときに変容されるのです。そのことをパウロは、この章の残りの部分で語っているのです。<sup>\*30</sup>

それはあたかも E・スタンレー・ジョーンズがローマ12章全体を読むかのようなようです。彼は、組会を用いているメソジスト教会で育った若者として、小グループの霊的育成と相互牧会に有効性を見出していました。組会について、ジョーンズは以下のように言います。「私たちが自分の成功とか失敗、喜び、問題について語るところが、私にとって世界的な運動になっていった理念の萌芽になっていきました。それはクリスチャンのアシュラム運

---

\*30 Adewuya, *Holiness and Community*, 169, drawing upon Richard B. Hays, *The Moral Vision of the New Testament* (San Francisco: Harper Collins, 1996), 196-197.

動です。」 ジョーンズは続けます。「誰もが、自分が責任をもち、逆に自分に責任を持ってくれるような緊密につむがれた交わりが必要です。」と。<sup>\*31</sup>この共同体的な側面は、彼のインドの文脈にあっていたのです。賀川豊彦もジョーンズのインドの働きにかなりの刺激を受けました。重要なのは、共同体の兄弟姉妹の交わりから離れては、私たちは、聖なる者とはなれないということです。受肉したホーリネスは心と体の分離がみられるものとは違い、私たちのすべてをもって礼拝することを意味します。

私たちは自分たちのからだを集合的にあらわします。つまりそれは私たちの体全体、霊的な礼拝をなす分離されない自己をさしだすのです。その時に神はキリストを通して私たちを全く集合的に、霊も魂も体もきよめてくださるのです。私たちがどのような礼拝を行うかについてはこの点は重要です。韓国の皆さんが祈る時には、ユダヤや東方正教会の祈り方と同じです。自分のすべてを用いて祈るのです。集合的な祈祷と聖書朗読、ひざまずき、立ち、手をたたきながら祈ること、聖餐を受ける前に前にでていくこと、そして賛美は、自己のすべて、からだも心も礼拝において賛美することを可能にします。

ローマ12章6－8節で語られている霊的賜物は、共同体のためのものであり、共同体を啓発するためのものです。それらは、神に近づく個人のために意図されているものではありません。それは彼らの目的ではないのです。もし賜物が、自分や人を共同体から引き離すものならば、それは聖霊の賜物ではないのです。

垂直的に実践される賜物は、神の共同体という文脈の中における自己よりもむしろ神との関係における自己を強調するものです。一方、言葉のように水平的に届いていくものは、共同体を内的に強め、神の国をあらわし、神の国をより広く拡張するものです。愛は、自己中心、民族中心になる時に敗北します。

ローマ12章9節は、私たちが変容された時におこる自己の本質について正確に説明しています。「愛は誠実でなければならない」とされています。ここにおける愛という言葉は、アガペーというギリシャ語です。「アガペーがあらわれるというのは、悪を憎み、善にしがみつくことです。自分自身や、自分の計画ではなく、身をささげることです。自分の意志、自分のやり方で行うのではなく、兄弟愛をもって互いに仕え合うことです。」

愛は、私たちがいかに伝えるかによって違いをもたらします。アガペーは私たち自身より

---

\*31 E. Stanley Jones, *A Song of Ascents: A Spiritual Autobiography* (Nashville: Abingdon, 1968), 42; Robert Schildgen, *Toyohiko Kagawa: Apostle of Love and Social Justice* (Berkeley: Centenary, 1988).



も他者に名誉を与えたいと願います。誰もほとんど座らない大きな椅子を他者が座るように押し上げ、自分により地位を与えるように主張することなく扉に背をむけている椅子を選ぶようなものであり、自分が誰であろうと、どのような場にいようと、どのような力を持つようと自分自身がいい地位につこうとかを考えないことです。

愛は誇りません。低い立場にいる人々と喜んでつながろうと願うことです。この世において、人よりも前に先んじることは、高い立場や高い地位にいる人と友人になることを意味します。私たちは自分の目的達成のため、他者をだしに使うのです。愛は反対です。愛は欺きません。愛は抑圧されている人、さげすまれている人、最低限の生活をしている人、忘れ去られている人を求めます。愛は自己中心と、民族中心を負かすのです。愛は私たちが調和をもって生きることを可能にするものです。

パウロをローマ12章18節に以下のように書いています。「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさなさい。」私たちが、コントロールでき、コントロールするように求めるものは、態度、感情です。私たち自身をコントロールするのです。私たちは他者の最悪ではなく最善を考えます。しかし、私たちが変えられる時、私たちの態度が変えられる時、他者をも変えることになることを驚きをもって発見します。聖化する恵みによって私たちは信仰の王路を歩むことができるのです。私たちは、他者に対して苦痛を負わせず、苦難に耐えることができるのです。私たちは勝利する必要はありません。たとえ相手が私たちをぞんざいに扱っても、その人たちを正しく取り扱うならば、私たちは彼らに恥を感じさせることができます。汝の敵を親切に扱いなさい、それによって彼らが自分のことを恥ずかしく思い、悔い改めに導くことができるのです。変容された生活からわきでる驚くべき愛は、悪に対して善で報いることを可能にし、迫害する者をも祝福することができるのです。愛は、私たちの自己中心の感情や思いをかたわらにおいやり、うらやましい思い、嫉妬、他者によって脅されたりすることがないようにしていただきます。

愛は私たちが喜ぶ者と共に喜ぶことを可能にします。というのも、私たちは純粹に心の奥底からその人のことを喜んでからです。愛は他者の痛みを感じることを可能にしてくれます。もし悪が共感、ホーリネスの欠如であるとすれば、反対に愛は、嘆く人と共に嘆くことを可能にするのです。愛は違いをもたらすのです。自己を主張しすぎて、一致しないことを主張しすぎると、共同体的な絆を脅かすこととなります。キリスト教界の初期において、アンソニーという修道僧は、町を離れ、荒野に行き、悪魔との闘いのための祈禱と孤独の生活に入りました。

後に皇帝コンスタンティヌスが教会の信仰の自由を認めた時に、何人かのクリスチャンは、教会自体が世的なことにかかわることを回避したのです。キリスト者は、修道院を設立して聖性を実践することに興味を持ちました。初期のエジプトの修道士たちには珍しく、バージルのような指導者は、世を捨てた生活を行い、共同の生活を行うという結論に至りました。

バージルは修道院の共同体をカエサリアに創設し、他の修道院の模範となりました。この時期において、彼は修道院生活を組織だてるための「規則」を作ったのです。バージルにとって、修道院は、神への奉仕の手段であり、従順のもとに共同体を形成したのです。

この規則は、祈祷の時間、手による労働、訓練の時間を決定しました。修道僧は、貧しい人をお世話しました。修道士バージルは、共に生活し、霊的家族を形成することを信じていました。修道院の共同体は、人間が社会的に他の人々と生きていくことに基礎づけられていたのです。

宗教的隠遁者の孤独は一人の個人に恩恵を与えますが、共同体的な生活は他者への愛と慈善を生み出します。共同体においては、私たちは霊の実と、キリストに倣う質をもって自分自身を全うします。私たちが他者と共に生き、働く時、私たちの粗野な部分、難しく、とげの多い、粗野なふるまいは、一人で生きるよりもさらに明白にさらされます。孤独の修道院生活はキリスト教の美德を反映する機会がありません。バージルは「もし一人で生きるならば、誰の足を洗うのですか」<sup>\*32</sup>と問うているのです。まさにホーリネスは、ただ単に個人的で内的であることはできないのです。構造的なホーリネスは、修道院の隠遁生活よりも共同体的なものを反映しているのです。

中世研究家、コリン・モーリスは、1050年と1200年の間に起こるヒューマニズムに至るまでの西洋文化における「個人主義の展開」の後をたどります。モーリスは、「西洋の文化は世界の文明開花の中では、ある程度例外的であった、個人主義を発展させてしまった。古代世界には「人格」という概念を示す用語がなかった。それが意味するのは「自分の存在と他の人々の存在の明確な区別を欠いていた」と議論します。<sup>\*33</sup> これを心にとめつつ、モーリスは、このことは、彼らが生活している集合的な境界を指し示すことなく、

---

\*32 Quote from C. H. Lawrence, *Medieval Monasticism: Forms of Religious Life in Western Europe in the Middle Ages*, second ed. (London: Longman, 1989), 10; Stephen Neill, *Christian Holiness* (New York: Harper and Brothers, 1960), 74.

\*33 Morris, *The Discovery of the Individual*, 3.

個々人を全く強調していない新約聖書からの乖離であったとしています。<sup>\*34</sup>

プロテスタントの間では、アナバプテストが、プロテスタントにおけるホーリネス運動の初期の形式でした。彼らは信仰においては個人的でしたが、同時に、緊密な生活様式と証しにおいて共同体的でした。彼らの子孫であるメノナイトをみてください。彼らはとても緊密につむがれている共同体であると同時に、世における宣教の特別な召しを受け、平和な生活を送り、慈善活動を行うのです。

彼らの社会に対する注意深い働きかけにおいて「19世紀のホーリネスの探求は、神秘的な黙想の脇道から奉仕の通路への展開した」とされるのです。テモテ・スミスは、どこかでこう注釈しています。「ホーリネスの伝えたものは、フランシス・アズベリーの時以降、社会正義の為のアメリカの運動にメソジストが参加する重要な触媒となったという証拠が多数ある」と語っています。<sup>\*35</sup>

ホーリネスは私たちの先祖に、キャンプ集会や連携だけでなく社会の中での積極的活動を引き起こしたのです。彼らは反奴隷制運動、女性の権利を認める運動、アルコールの売買を禁じる運動を指導したのです。

19世紀後期、彼らは孤児院を造り、未婚の母たちのための家を作りました。そして店頭などでホームレスや貧しい人のための給食活動を行いました。19世紀ホーリネスは個人主義を強調する一方で、ホーリネスをあらわす方法においては、とても共同体的でした。ホーリネスの世代（1915－45）年は、二つの世界大戦の間にある時期ですが、モダン主義とファンダメンタリストの議論によって大きく影響を受けました。彼らの前に歩んだ者たちに特徴的であった個人と社会の変容の統合は、変容していく社会において破綻し、共感できなくなり、大胆でなくなっていくます。

セクト主義が律法主義とともに大きくなりました。私たちは、自由な恵みよりも自由意志を強調するペラギアン主義的方向によりがちでした。結果として私たちは規則を付加してきました。「これをしてはいけない」というリストを付け加えていくにつれて、そこから出てきたものは、ホーリネスを愛というよりも律法に関連づけられたことです。

もし人が第2の転機の体験について証しすることができるとしたら、もし人がマニユア

---

<sup>\*34</sup> Morris, *The Discovery of the Individual*, 10-13.

<sup>\*35</sup> Smith, "Introduction," to Charles Finney, *The Promise of the Spirit*, ed. Timothy L. Smith (Minneapolis: Bethany Fellowship, 1980), 13.

ルや宗教規則によって生きるとしたら、その人が清いのであるという具合です。幾つかの場所で、人々は貧困の街々から出て行き、郊外のより快適な場所へと移住しました。自分とは異なっている隣人から離れることこそが、より聖くなるために必要なのだというのがその意味です。

第2世代は、キリストと社会をある程度一致しないものとして考えましたので、キリストと文化の間に分離をもたらしました。私たちは、ホーリネスが、周辺化され、苦しんでいる人々の状況に対してより共感を持つべきであるという考えをあまり持てなくなったのです。問題をかたづけける一つの方法は、無感動な神を要求することです。この神は、人間が苦しんでいてもそれによって何かを感じたり、動いたりするお方ではありません。もし神ご自身が私たちに弱さがあっても、何かを感じるができないならば、私たちは自分自身が他者の苦しみのことを気にするという事は困難です。せいぜいそれは遠くから同情するものです。私たちの状況に共感してくださる方としての神のより適切な理解は、愛し、恵み深く、共感的である私たちの天の父がきよくあられるように、清いということは何を意味するかについての明解な理解です。<sup>\*36</sup> 私は、西洋人が、霊的生活を他者との関係から分離してしまう無感動な神と聖性の概念を伝えてしまったのではないかということをおそれます。外国においてホーリネスを説教することを試みる一方で、宣教師たち自身はその理想にはほど遠い存在でありました。通常、それは、とても繊細な問題でした。それは独占と支配のための闘いおよび彼ら自身の人間関係の破綻というものでした。

ある宣教師が、ホーリネスを標榜したために、他の宣教師たちの間と疎遠になるという明白な信頼性に関する隙間があったのです。謙虚さをかなり強調し、人間同士のスムーズな関係を強調した人々の間では、これらは、ホーリネスの性質についてどのように伝達されたのでしょうか。

実際にきよい生活を行わずに語ることはできたのでしょうか。驚くことに、神は人間のもろさや弱さの基礎においても強い教会を作ることができた方、またできるお方です。しかし、人格や個人の良心に対する宣教師の強調は、石田学先生が語っておられますが、軍国主義が日本に起こった時に、逆に神社への崇敬を許してしまいました。教会は、キリスト教信仰は、個人的で霊的な事柄だけのことでであると教えていました。その結果、日本の教会は自分たちのことを忠実なクリスチャンであると考え、その結果、軍国主義と植民地

---

\*36 Chun Kwang Don, "Doing Empatheology as a Praxis of Holiness Theology: Theological Reading Luke 10: 30-37," paper presented at Asia-Pacific Nazarene Theology Conference, Seoul, Korea, October 7, 2003. See also Chun's Vanderbilt professor Edward Farley, *Divine Empathy: A Theology of God* (Minneapolis: Fortress, 1996).

主義を支持することになってしまったのです。<sup>\*37</sup>

問題となったもう一つは、私たちがホーリネスの内容よりも、いかにホーリネスが起こるかという状況を優位に置いたということです。第2の恵みに対する証しは、愛を強調するよりも、いつ、どの場所で、全き聖化の恵みを受けたのかということがより重んじられました。

その状況を証しできた人に対して、もし彼らが人種差別主義者で、配偶者や子どもたち、キリストにある兄弟姉妹に不親切であったとしたら、何を語ることができるでしょうか。ある例では、私たちホーリネス運動は、本質的なもの、非本質的なものを区別することを可能にしてきた慈善や恵みよりも外面にあらわれる正しさにのみに焦点をおいてしまう裁く人、叱責する人、口うるさい人々として知られてしまったのです。

以前中国への宣教師であったA・Jスミスは、宣教師、中国人の労働者、学生による回心が起こった時代以降の1920年代において神の霊が劇的に注がれるのを見てきた人ですが、奴隷的な支配の後、人々が誤った救いについての確信の意味を与えてしまったと論じました。

スミスはこう語ります。「あなたは映画には行かないかもしれませんが、あなたには怒りの発作があるのです。それは、あなたが何を告白していても救われていないことを示しています。野球観戦には行かないかもしれませんが、あなたは隣人のことを悪くいうことによってその人を殺しているのと同じです。飲んだり、吸ったり、ガムをかんだりはしないでしょが、あなたは心の中に偶像を持っており、それは神があなたの人生では第1となっていないことを示しています。あなたは呪ったりはしないかもしれませんが、でもあなたは妻、夫、子どもたちに対して厳しく、みにくい人です。あなたはお化粧をしないかもしれませんが。でもその質素な洋服を着つつ誇っているようなものです。」スミスは続けて、「あなたはギャンブルはしないかもしれない。でも牧師に対して後ろから厳しいことばかり言うのです」もしこれが正しいとすれば、真実のホーリネスというのは何とこっけいなものになることでしょう。もしこれが本当だとするならば、悔い改めは一体何のためにあるのでしょうか。

---

\*37 Manabu Ishida, "The Scriptures as the Book of Sacred Drama of God's Holy People: Interpreting the Scriptures in Japanese Context," paper presented at the Asia-Pacific Nazarene Theology Conference, 2003. See J. G. Morrison to C. W. Jones, April 20, 1939 (Nazarene Archives, file 540-25). Richard Baker makes a similar point in *Darkness of the Sun: The Story of Christianity in the Japanese Empire* (New York: Abingdon-Cokesbury, 1947), 167.

ホーリネスの民は、「自分たちがそうであるべきよりも自分のことを高く評価するように考えてしまう」という試みに注意する必要があるのです。イエスが非難した義の一種である独善的であることと真実のホーリネスの間には違いがあるのです。

「完全の主張は、容易に高慢と自己満足でおわってしまうことがある」のです。ステファン・ナイルは語ります。「他のキリスト者に厳しすぎることで、霊的なはかりでまだ高いところまで達していない人に対して優位感を持つこと」に警告を発しています。ウェスレーは不寛容を拒否し、慈善に好み、注意深く規則正しさを見つめ、喜びに満ちた生活をすむ信徒のようであればならないというのは言い過ぎでしょうか。<sup>\*38</sup>

ウェスレーにとってホーリネスと幸福は、排除しあうのではなく相互補完的でした。ウェスレーの倫理は、人々が現実に幸福になるものです。幸福主義的(?)です。でも私たちは不幸にも、信徒のようにならず、陽気で、いつも笑顔でいられるような信仰の基礎を欠いているのです。<sup>\*39</sup> もちろん、規律と幸福も相互補完的であり、互いに相対してはいません。ホーリネスがより習慣になるにつれて、また反復的な実践によって、それが私たちの性質そのものとなるにつれて、それは難儀な仕事ではなくなり、より徳になっていくのです。

何世代も、ウェスレーは、世的であることを拒否してきました。大恐慌の時はホーリネスの民は、自分達の宝石を祭壇にささげたのです。正しく考えれば、この背後にある論理は、自分自身の魂の聖化の為というよりも他者に与える為の行為でした。教会は、宝石を売りました。宣教師が宣教地区に残れるかもしれなかったのです。彼らは質素なことを目的のものとしては求めませんでした。それは、宝石や他の浪費を福音が完全な意味をなすようにあきらめたのです。後に、世経済が回復してきた時、ホーリネスの民は、そのような急進的な選択をしなくてもよかったです。彼らは快適に生き、スタイリッシュに生き、牧師謝儀、宣教師に謝儀を払うこともでき、学校も開校し続けられたのです。<sup>\*40</sup>

これは教会と文化の分離の意味とか、その規範や基準が誤っていたという意味ではありません

---

\*38 Neill, *Christian Holiness*, 37.

\*39 Diane Leclerc, *Discovering Christian Holiness: The Heart of Wesleyan-Holiness Theology* (Kansas City: Beacon Hill, 2010), 99, in reference to Thomas Aquinas, and chapter 11, 255-272. Compare similar ideas in Japanese culture as described in Ruth Benedict, *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture* (Boston: Houghton Mifflin, 1946; reprint, Cleveland: Meridian, 1969), 249, 281.

\*40 A. J. Smith to J. G. Morrison, January 29, 1931 (file 447-59, Nazarene Archives). See also Mary A. Tenney, *Blueprint for a Christian World: An Analysis of the Wesleyan Way* (Winona Lake, IN: Light and Life, 1953); Ronald J. Sider, *Rich Christians in an Age of Hunger: A Biblical Study*, second ed. (Downers Grove, IL: InterVarsity, 1984).

ません。世の倫理と神の国の倫理に境界設定のための一線を引く必要は確かにあります。それは、ホーリネスの民の間に、社会からの圧力がどれだけあっても個人や教会は世と対立して立っているという社会の中の共同体としての意味が存在していたからでした。この原則の最もいい例は、戦争中の日本におけるホーリネス教会やホーリネスの民の証しに見ることができます。リチャード・T・ベーカーは、メソジスト教会を研究してきた人ですが、皮肉をこめて、それまで社会正義というものに関心を寄せてきた団体や教派は、全体的に軍国主義に対して、「先ず何よりも宗教的であったホーリネスの民のように固く立つことはなかった」と語っています。<sup>\*41</sup>

ウェスレアンは言葉、信条、教理、組織を必要としています。聖霊は、形式というものを思いも掛けず壊し、私たちに新しいレベルと受肉した愛の形態へと創造的に促していくのです。しばしば私たちは、お世話や、尊敬、共感、赦し、贖いの愛を示すのに失敗します。サモア人のペニペルティ・ファカウアは、「全き愛は普遍的な言語であり、家族の言葉であり、関係の用語である」と語ります。<sup>\*42</sup>

### C. 受肉したホーリネスの状況

受肉したホーリネスは集合的な証しを強いるものです。それは集合的な応答も要求するのでしょうか。宣教学者も歴史学者もキリストへの集合的な動きについて考えるように私たちをせかしているのです。私たちは確かに、そのつど一粒のお米で炊くことはできるのですが、一つの大きな、炊飯器でご飯を炊くこともできるのです。

たとえを変えれば、魚を一本の釣り竿でつることもできるでしょうが、網でとることもできるのです。キリスト教の歴史の初期において、すべての王国は、指導者の意志によってキリスト教となりました。宗教改革時代において、国家はプロテスタントになりました。

カテキズムと敬虔主義がその後続きます。より最近、インドでは、全村が、首長と長老に導かれてクリスチャンになったのです。続けて他の人々を集合的にクリスチャンにするよりも弟子の訓練がその後続きました。<sup>\*43</sup>

---

\*41 Baker, *Darkness of the Sun*, 144.

\*42 Fakaua, "Teaching and Preaching Biblical Holiness in the South Pacific Island Context," in *The Challenge of Culture*, 28. See Mildred Bangs Wynkoop, *A Theology of Love: The Dynamic of Wesleyanism* (Kansas City: Beacon Hill, 1972), 47-52.

\*43 J. W. Pickett, A. L. Warnhuis, G. H. Singh, and D. A. McGavran, *Church Growth and Group Conversion* (South Pasadena, CA.: William Carey Library, 1973), especially the chapter by Warnhuis, "Group Conversion," 8-21.

東西文化を融合させたようなフィリピンにおいては、訪問しているアメリカの伝道者たちは、彼らが説教した後に全会衆が前にでることに驚きます。会衆は、メッセージに全体的に応答するように説かれるのです。これぞ神の言葉に対する霊的な礼拝を甘受することになります。集合的な悔い改めにおいて家族やグループを招くことは賢いことかもしれませんが。各人はグループの一員であり、その中で応答するので、神の赦しを集合的に求めるのです。

アジア・太平洋地区の多くの場所で回心は、しばしば個人の宗教の変化を志向し、家族や伝統や共同体から離れることを意味してきました。西洋では、メッセージに対する瞬間的で感情的な応答することをしてきました。

楽観的にみれば、頑なな、悪にそまった罪人が聖会にでて、福音を初めて聞き、そして招かれて恵みの座で悔い改め、新しい人として起き上がる。伝道者はどのような物語をよく語ります。

しかしアジア・太平洋地区では、キリストに回心した第1世代は感情的ではありませんでした。むしろ、それは、とても注意深く計算された行事だったのです。台湾ではあるグループの中で信仰者は家族の他の一員がクリスチャンにならないと洗礼を受けることができないのです。

このケースにおいては、回心を洗礼に結びつけようとする論理を見ることができます。キリストを救い主として信じ、主の民を兄弟姉妹として受け入れるという公の告白です。そのようにして人は新しい共同体に加わります。典礼は回心の経験と結びついているのです。

通訳者が日本の文化について書いていることはこの地域全般において真実だと思います。

「どの日本人も集団の一員として参加しなければなりません。なぜならば日本人は集団からの孤独を恐れるからです。大学生も職場の働き人も放課後や仕事の後の飲み会に参加しなければなりません」「これは交わりが集団の中に一体感をつくりだすからです。集団の雰囲気が、集団の内側でどのように行動すべきか決定します。ですからこの関係は、独裁者一奴隷の形態だということができます。これはボスへの忠誠、忠実、感謝、義務と関連している。」通訳者は続いて「その結果、集団の決定に従わないのは、ボスや集団の他のメンバーに対して罪ということになります。」<sup>\*44</sup> と語ります。集合的に言えば、これは良い方にも悪い方にも使用できます。つまり集団の指導者が神の国の理想に燃えているの

---

\*44 “The Challenge of Articulating the Doctrine of Holiness in Japanese Culture: Japanese Conception of Sin and the Doctrine of Sanctification,” in *The Challenge of Culture*, 19.



か、それとも他の欲望に動機づけられているかによるのです。

私たちは子どもたちに、「主われを愛す」という賛美歌で「主が私を愛していることを知っている」ことを教えます。これは個人的に表現された素朴な福音です。でもこのフレーズは次の「イエスは幼き子どもたちを愛している。世のすべての子どもたちをも」とバランスよく考えなければなりません。

ある台湾での礼拝で、いくつかの民族から人々が集まっていたのですが、牧師は各民族に「主われを愛す」と自分たちの言語で言わせたのです。韓国の女性の方は「われ」という表現がよくできませんでしたが、その代わりに、彼女は「主、韓国人を愛す」と語ったのです。彼女は福音をこのように表現したのです。イエスさまは韓国人を愛してください。私も韓国人の一人であると。

もし私たちが回心を集合的に起こるものとして考え始めるならば、全き聖化はどうでしょう。新約聖書のホーリネスに関する聖書の箇所をみるならば、「私たちの」とか「私たちは」というように集合的に、複数の聖なる者となるように語られています。ペンテコステが起こった二階の部屋で、聖霊が降った時に信仰者は「一つの場に集まっていた」のです。そのとき人々は聖霊に満たされたのです。

ペンテコステ時の聖霊によるバプテスマの結果、証しの力が与えられ、心のきよめ（使徒15章9節）だけでなく、共同体の各メンバーへの集合的な責任（使徒2章44節）も与えられたのです。カエサリアの（コルネリオの家）や他の場所で聖霊は集合的に人々の上に現れました。

エフェソ3章14-19節をこの観点で見ると、キリストは信仰によって私たちの共同体的な心に住んでくださいます。私たちはともに、集合的に、愛のうちに根ざし、建て上げられます。それは私たちに、すべての聖徒とともに力があられ、主の民として共に、教会として、子どもたちとして、神の十全のはかりに満たされるまでキリストの愛がいかに広く、長く、高く、深いかを把握させてくださるのです。

ホーリネスの民の間では、聖霊は集合的に注がれるのです。1927年中国に大きなリヴァイヴァルがおこった時、聖書学校の学生たちは、そのすべて地域のむ村々に広めました。多くは、宣教師も含めて、もう宣教師はここでは必要ないと確信するようになりました。

た。<sup>\*45</sup>

他の場所では、私たちの歴史を通して、日曜日の夜の伝道集会、聖会、キャンプ集会、チャペルや総会のような大きな集会において、聖霊は集合的に私たちに降ったのです。おそらく第2の転機を経験した多くの人は、個人への注ぎよりも集合的にそのことが行われることをご存知のはずです。彼らは、聖霊が彼らの心を温め、心をとかし、礼拝に備えられます。どのようにしてこの神の聖化する聖霊が注ぎが現れるのかは、文化によってはそれほど異ならず、時が違っても変わらないと思います。神が聖霊を降り注がれる方法は同じではないでしょうか。神は人々を、皆とともに、力強く満たし、きよめ、力を与えたいと願っておられることをしています。<sup>\*46</sup>

## II. 共感に受肉したホーリネス

ステファン・ネイルは彼の著書『クリスチャンホーリネス』の中で、「他者の魂の必要を忘れ、神との個人の魂の合一のみを求めることは、クリスチャン的な生き方であろうか」と問います。スタンレー・ハワースは、「ホーリネスの理解はあまりにも霊的すぎた」と語っています。愛は実際に働くための特別な場面と働くための課題が必要なのです。

現代世代が、ホーリネス運動をジョン・ウェスレーの神学的なルーツへと戻してきました。それは、貧しい人や都市における牧会ということを強調しました。給食活動、様々な危機的状況に対する集合的な応答は地域における慈善を開始したのです。長い離婚の後に、伝道はついにあわれみのわざと一つになることができたのです。<sup>\*47</sup>

---

\*45 Cunningham, *Holiness Abroad: Nazarene Missions in Asia* (Lanham, MD: Scarecrow, 2003), 159.

\*46 If conversion may be linked liturgically to baptism, could the experience of entire sanctification as a second work of grace in which we are filled with the Holy Spirit come similarly, with careful planning and preparation of heart? The Anglican tradition in which Wesley was reared understood the two-foldness of grace liturgically. The second work of grace among Anglicans comes at the time of confirmation. According to the 1662 *Book of Common Prayer* (which Wesley used), the Bishop prays for those being confirmed: "Almighty and everliving God, who hast vouchsafed to regenerate these thy servants by Water and the Holy Ghost, and hast given unto them forgiveness of all their sins: Strengthen them, we beseech thee, O Lord, with the Holy Ghost the Comforter, and daily increase in them thy manifold gifts of grace; the spirit of wisdom and understanding; the spirit of counsel and ghostly [spiritual] strength; the spirit of knowledge and true godliness; and fill them, O Lord, with the spirit of thy holy fear, now and for ever. Amen." Then the Bishop lays hands on and prays over each one, saying, "Defend, O Lord, this thy Child [or this thy Servant] with thy heavenly grace, that he may continue thine for ever; and daily increase in thy Holy Spirit more and more, until he come unto thy everlasting kingdom. Amen." Could it be that by conscious, volitional intent, we sought the Holy Spirit's purifying fullness, and came collectively to be filled? See <http://www.eskimo.com/~lhowell/bcp1662/baptism/confirm.html#Preface>, which contains the 1662 *Book of Common Prayer*. See Laurence Wood, *Pentecostal Grace* (Wilmore, KY: Francis Asbury, 1980), 240-257. Wood is careful to mention, though, that Wesley himself seems not to have made this connection.

\*47 Hauerwas, *Sanctify Them in the Truth*, 83, 125. For examples see, for instance, R. Franklin Cook and Steve

ウェスレアの運動には、霊的なものと社会的なものとの一体感があつたのです。それはどのような考えがあろうとも引き離してはならないものです。社会に変化をもたらす力としての教会の結集は、ウェスレーの受肉した社会的聖化の神学から流れでたものです。キリスト者の完全ということでウェスレーが意味したことについて挑戦を受けた時、ウェスレーはイエスの言葉を思い出していました。それはルカ10章27節です。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』」

ホーリネスはウェスレーにとっては受動的でなく積極的なものであり、信仰の完全な働き、希望の忍耐、愛の労苦なのです。キリスト者の完全は地においても天におけるがごとく、恵みによって可能な愛によって神の意志を行うことです。<sup>\*48</sup> 憐れみのわざは、ウェスレーにとって義務以上のもので流れ出るものです。「あわれみの行為」は人が望んでいたキリストのような者になっていくことです。霊的成長は貧しい人に対する債務からくるのです。

しいたげられた人たちとの連携から離れた「純粹な霊性」はありません。ウェスレーにとって、忠実は共同体を通しての社会的な行動は、世界と御言葉に基礎を置く必要があるスピリチュアルフォーメーション（霊的形成）に基礎づけられたものなのです。<sup>\*49</sup>

ウェスレーは山上の垂訓はこの時と場における倫理、つまり世界における倫理を提供するものと信じていました。ウェスレーにとって恵みはこの世の生活において罪をきよめ、罪に勝利することを可能にするものです。贖いの範囲はすべての被造物に広げられるのです。<sup>\*50</sup>

神の国は王国の理想に動機づけられたクリスチャンたちの行動を通して実現するので

---

Weber, *The Greening: The Story of Nazarene Compassionate Ministries* (Kansas City: Nazarene Publishing House, 1986); Howard Culbertson, *The Kingdom Strikes Back: Signs of the Messiah at Work in Haiti* (Kansas City: Nazarene Publishing House, 1990). See also Bryan P. Stone, *Compassionate Ministry: Theological Foundations* (Maryknoll, NY: Orbis, 2002).

\*48 “The Principles of a Methodist,” *The Works of John Wesley*, vol. 9: *The Methodist Societies: History, Nature and Design*, ed. Rupert E. Davies (Nashville: Abingdon, 1989), 55; “A Plain Account of Christian Perfection,” *Works*, third ed., 11: 371, 387. See also Lai Pan-chiu, “Inter-religious Dialogue and Social Justice: Cobb’s Wesleyan Process Theology in East Asian Perspective,” *Asia Journal of Theology* 25 (April 2011), 94.

\*49 See Randy Maddox, “‘Visit the Poor’: John Wesley, the Poor, and the Sanctification of Believers,” in *The Poor and the People Called Methodists*, ed. Richard P. Heitzenrater (Nashville: Abingdon, 2002), 59-81. Similarly, see Rebekah Miles, “Works of Mercy as Spiritual Formation: Why Wesley Feared for the Souls of the Rich,” in *The Wesleyan Tradition: A Paradigm for Renewal*, ed. Paul W. Chilcote (Nashville: Abingdon, 2002), 98-110.

\*50 Theodore Jennings, “Wesley and the Poor: An Agenda for Wesleyans,” in *The Portion of the Poor: Good News to the Poor in the Wesleyan Tradition*, ed. M. Douglas Meeks (Nashville: Abingdon, 1995), 33, 37.

す。愛こそが、王国を獲得し、目的を達成する手段です。まず神との変容する出会いがなければ自分や隣人を愛することはできません。

ウェスレーは山上の説教の中で、キリストとその贖いにおける信仰がなければ神に対する愛はなく、神の子どもとして人々と共に証しする聖霊から離れては信仰はないと語ります。

もし神への愛があるならば、人間の生活の価値や方法は変えられるのです。ウェスレーは「義、あわれみ、真実が私たちの精神と行動を支配しますように」と言っています。私たちに余剰のものがあれば、隣人の便宜のためにささげましょう。私たちの利益は隣人の必要のために、私たちの必要は隣人の窮地のために用いられるべきです。<sup>\*51</sup>

ウェスレーはわざを生み出さない宗教を受け入れることはできませんでした。この働きは、個人が救いを獲得することによる手段ではありません。ウェスレーは恵みによらなければ何ごとも不可能であることを明確にしていました。ひとりよがり人間というものは何もできないのです。<sup>\*52</sup>ウェスレーは人間の本性について間違った考えはもっていなかったのです。

ウェスレーはかつて人間は「不信心」を灯していた存在であり、息をはくたびに罪を犯してしまう者であり、実際に、言葉と行為において自分の髪の毛の数よりもたくさん現実に罪を犯してしまう」と語っています。<sup>\*53</sup>ですからどのようなよい働きであっても、それは人間の努力からうみだされるのではなく、聖霊の働きによるのです

それらは、救いの実と証しと保証でした。信仰それ自体はウェスレーにとっては知的や「靈的」なものだけでなく神を完全に信頼することです。信仰は、積極的な犠牲を伴う、創造的に贖いの愛をつくりだすホーリネスと愛を生み出しました。<sup>\*54</sup> ウェスレーの考えの中に、私たちは個人と共同体のバランスを見出すことができます。ウェスレアンとして私たちは、義と愛とあわれみの王国をこの世に打ち立てようという働きに熱心なクリス

---

\*51 "Upon Our Lord's Sermon on the Mount: Tenth Discourse," *The Works of John Wesley*, vol. 1: *Sermons*, 662; "A Plain Account of Christian Perfection," *Works*, third ed., 11: 441.

\*52 "A Plain Account of Christian Perfection," *Works*, 11: 440.

\*53 "The Righteousness of Faith," *The Works of John Wesley*, vol. 1: *Sermons*, ed. Outler, 212. See also "Original Sin," *The Works of John Wesley*, vol. 2: *Sermons*, ed. Albert Outler (Nashville: Abingdon, 1985), 172-185.

\*54 "Salvation by Faith," *The Works of John Wesley*, vol. 1: *Sermons*, ed. Outler, 125; "A Plain Account of Christian Perfection," *Works*, third ed., 11: 367-368. The preceding paragraphs are from Cunningham, "Reflections on Wesley's Understanding of Social Holiness" [*Taiwan Wesleyan Theological Journal*] 1 (1997): 87-101.

チャンを獲得するのです。

正しい教理と正しい実践は、クリスチャン生活の重要な構成要素です。ウェスレーは大きな財産を積むことを正しいとは考えませんでした。特に、富む者が貧しい人々の利益を奪うようなやり方、それは神が好まれる特別なしるしではないと考えます。

ウェスレーにとって資本を蓄え、お金を自分の慰めやぜいたくのために使用することも理にかなったものではありません。彼は富むことが罪だとは言っていないが、それは危険だということです。どのようにしたら真実の宗教、十字架をとることを、成功してぜいたくになることと調和させることができるのでしょうか。<sup>\*55</sup>

ウェスレーは富める者も永遠に失われているものであると考えていましたので、彼らに大胆に語るのに躊躇はありませんでした。「富について私は何をすべきでしょうか。」と富める者が尋ねます。ウェスレーの回答は単純なものです。それを貧しい人、飢えている人、裸の者に施し、施しなさい。ウェスレーはチャールズという言葉から引用します。<sup>\*56</sup>

私の資産はすでに天国にある。私の宝のすべてはあなたの愛である。あなたは、今、さらに物を買う余裕があるとしたら、それはお金を持っているからなのか。ウェスレーは、あなたが貧しかった時よりも今も主の財産を無駄する権利はない」と反対する。

あなたは自分の過去の説明を主の前にしなければならぬ。あなたが金持ちであり、神のものを強奪することは、合理的で正しいのであろうか。もしあなたが自分の必要以上のものを持っているとしても、神はこの余剰のものを必要な人に与えるためにあなたに与え、信頼されたのである。ジェニングズというウェスレーの学者は、ウェスレーの心情を、まさしく「富の再分配」と呼んだのです。<sup>\*57</sup>

この理由において、マンフレッド・マッカートは、ウェスレーの経済倫理はカルヴァン主義の人々の倫理とは異なり、ウェスレーは「資本主義の精神」を促進することはほとんどしなかったと考えました。ウェスレーは儉約、勤勉、熱心に仕事をすることは強調しますが、しかし利益、富、資本の蓄積のために無制限に努力することには強く反対したのです。

社会的な集団は、責任があり、富める者は自分たちの生活様式のぜいたくさを自発的に制限しなければならないのです。また、政府は、市民の経済的福利厚生に責任をもっていると信じ、社会はすべてのものを、食欲を促進する自由な市場に任せるべきでないと考えました。政府は、密輸入、お酒、アルコール中毒をコントロールしなければならず、低価格におさえるように介入すべきであるとしたのです。<sup>\*58</sup>

ウェスレーは英国全体に大きな道徳的な再生をもたらしたリヴァイヴァルをうみだすことによりかなり貢献しました。リヴァイヴァルは様々な事柄において、国家的な良心を駆り立

---

\*55 “Dives and Lazarus,” *The Works of John Wesley*, vol. 4: *Sermons*, ed. Albert C. Outler (Nashville: Abingdon, 1987), 12.

\*56 “On Worldly Folly,” *The Works of John Wesley*, vol. 4: *Sermons*, 133, 138.

\*57 “The Danger of Increasing Riches,” *The Works of John Wesley*, vol. 4: *Sermons*, 183-184; Jennings, *Good News to the Poor: John Wesley’s Evangelical Economics* (Nashville: Abingdon, 1990), 97-117. See also the sermons “On Dress,” 248-261, and “The More Excellent Way,” 263-277, in *The Works of John Wesley*, vol. 3: *Sermons*, ed. Albert Outler. See also Mary A. Tenney, *Blueprint for a Christian World: An Analysis of the Wesleyan Way* (Winona Lake, IN: Light and Life Press, 1953), 217-237.

\*58 Marquardt, *John Wesley’s Social Ethics: Praxis and Principles* (Nashville: Abingdon, 1992), 41-47. See also Bernard Semmel, *The Methodist Revolution* (New York: Basic Books, 1973), 71-79.

てたのです。ウェスレーは社会の正義は個人のホーリネスから始まると信じていました。しかし、罪は個人的なものをこえたものであることも理解していました。社会が集会的に、政治的にさえ発言しなければならない悪があるのです。奴隷制ほど道徳的な憤りと政治的な行為の悪名高い原因はないと考えていたのです。

ウェスレーは個人的なもの、組織的な罪の両方の側面に関心をもち、個人的であると共に社会的な贖いを模索しました。ウェスレアン主義は、他者に対して一方で聖書を、他方は渴いている人に差し上げる一杯の水をもって遣わされていくという伝統を持っています。これらは矛盾するものでなく、神の国の機能にとっては補い合うものです。

ウェスレーはいかにして、彼がおこなった説教がよいものをもたらし、効果があったと知っていたのでしょうか。彼は講壇への招きは行いませんでしたし、回心者を数えたりもしませんでした。ウェスレーは共同体全体に聖霊の臨在を観察していたのです。<sup>\*59</sup>

ウェスレアンは、ここ3世紀、改革運動の最前線にあったことは驚くことではありません。19世紀に起こったホーリネスの連盟、宣教局、教会は様々な形態、形式をとりました。指導者たちは、すべてが次々に伝わっていくきよめる聖霊の働きだと信じたのです。ウェスレアンメソジストもフリーメソジスト教会もメソジスト監督教会より、特に奴隷制度への強い反対をしなかったことから分離したのです。

両者とも心と生活のホーリネスを説教しました。フリーメソジストはその規則に全き聖化への明快な声明を含んでいます。両グループは、メソジスト教会の「荒野の状態」に反対したのです。

フリーメソジストは、会議や集会で信徒にも同等な立場を与えました。彼らは、信徒が講壇で説教することも許し、富める者と貧しい者の洋服にも区別をつけるべきでないとし、質素な教会を建設したのです。フリーメソジストはこれらの外見の特色と霊的聖別をホーリネスと同一視したのです。<sup>\*60</sup>

ウェスレアンが西の方に移住しはじめた時、そこでも改革を開始しました。中国ではメソジストは反アヘン運動の最前線として活躍し、西洋の植民主義者たちに対して中国人の側

---

\*59 A. Skivington Wood, *The Burning Heart; John Wesley: Evangelist* (Reprint, Minneapolis: Bethany, 1978), 160-166.

\*60 Kathryn Long, "Consecrated Respectability: Phoebe Palmer and the Refinement of American Methodism," in Nathan O. Hatch and John H. Wigger, eds., *Methodism and the Shaping of American Culture* (Nashville: Abingdon, 2001), 281-307; Howard Snyder, *Populist Saints: B. T. and Ellen Roberts and the First Free Methodists* (Grand Rapids: Eerdmans, 2006). See also Robert W. Wall, "The *Embourgeoisement* of the Free Methodist Ethos," *Wesleyan Theological Journal* 25 (Spring 1990), 117-129.

にたったのです。賀川豊彦はジョン・ウェスレー、アッシジのフランチェスコや救世軍を自分の働きの模範としました。.\*<sup>61</sup> \*<sup>62</sup>

19世紀に特徴づけられる個人と社会の倫理の統一は1920年代に分裂します。個人的な聖化を強調するホーリネスの教派と社会的な変容の可能性を強調するメソジストのグループです。この失われた統合には様々な理由があります。

ホーリネスのグループはより小さく、文化的にはなおざりにされてきた者でした。彼らは社会全体に影響を与えるという幻はもちませんでした。一方「社会的な福音」は人間の罪深さや神さまからは失われた者であるということを強調しない自由主義神学と連携していきます。

分裂は、刷新されたグループが多くの古い教派の中で始まり、慈愛の業が多くの福音主義の組織できちんと組み込まれた要素になる1970年代に至るまで続きました。\*<sup>63</sup>

この世において神の恵みが働いているという本質的な希望が自然に戻ってきつつありました。これは、この世におけるクリスチャンとして私たちを本当の意味で特徴づけるものです。これこそがホーリネス教会のこの世における使命です。それは人種や民族の差は様々あっても、これまで疎かにされていた人々の、遠く離れた世界の地域にでていき、貧しい人々の中に聖なる火の中心となるものを設立することです。

私たちはこの世界のさげすまれた人々、エイズの犠牲者、障害のある人、誰も隣に座ってくれない人の所にいき、隣に座るのです。

大乘仏教は17世紀に日本人の心を慈善活動やその知恵思想によって勝ち取りました。儒教も活動しはじめた時にその地位を築いたのです。両者の伝統は武士道精神にも貢献しました。ロバート・ベラーがそれを以下のように語ります。「それは、内的純血さに伴われた倫理的行動主義であった。」と。もしそれが事実であるとしたら、それはウェスレーンのあわれみの理解と似ているのではないのでしょうか。.\*<sup>64</sup>

---

\*61 Ryan Dunch, *Fuzhou Protestants and the Making of a Modern China, 1857-1927* (New Haven: Yale U. Press, 2001), 54-55, 64, 1-5-107, 144.

\*62 Robert Schildgen, *Toyohiko Kagawa: Apostle of Love and Social Justice* (Berkeley, CA: Centenary, 1988), 43, 49, 132; David P. King, "The West Looks East: The Influence of Toyohiko Kagawa on American Mainline Protestantism," *Church History* 80 (June 2011), 305.

\*63 Rodney Reed, *Holy with Integrity: The Unity of Personal and Social Ethics in the Holiness Movement, 1880-1910* (Salem, OH: Schmul, 2003).

\*64 Raymond Hammer, *Japan's Religious Ferment: Christian Presence amid Faiths Old and New* (New York:

## CONCLUSION: A HOLINESS PEOPLE 結論、ホーリネスの民

18世紀のウェスレアン主義と20世紀のホーリネス運動は教会内における刷新、改革のために意図されたものであり、彼らが教会内に残るのであれ、去るのであれ他者がその後続くように召した模範的な道でありました。

ウェスレアン主義は中道ではありますが、それは王道でもあります。西洋人は、ホーリネスに個人が招かれていることを強調しましたが、アジアの人々は、個人とともに集合的な意味での召しを見てもいいのではないのでしょうか。ホーリネスの王路は信仰者と教会両方への召しなのです。王路という言葉はイザヤ35章8節（そこに大路が敷かれる。その道は聖なる道と呼ばれ／汚れた者がその道を通ることはない。主御自身がその民に先立って歩まれ／愚か者がそこに迷い入ることはない。）とありますように、神との交わりにおいて、神秘的な内側の生活がきよめられると同時に、心のきよめへ至る道を提示しながら、憐れみの共感のわざとともに、聖霊のすべての賜物とともに、信仰者の集合的なからだ全体の中でそれが行われることです。

王路とは、共同体の徹底的な従順、弟子化、継続的に全くきよめられることを意味します。それは世界の上を通っている路です。それはキリスト者の完全と全き愛を示す路です。

キリスト者の完全は、罪を犯さない墮落以前のアダムの完全になるのではなく、傲慢な人間的な完全ではありません。それはキリストに似るものとなるということであり、神の性質が私たちの性質に反映されるということです。

この完全は恵みによってのみ、今の人生において達成可能なものでありますが、別の意味では、栄化まで続くものです。それは愛における完全であり、行いや知識の完全ではありません。私たちの欲望がきよめられ、神が愛されたように愛することです。

それは神の恵みによって完全とされるのであり、それは人間の愛でもあります。それはアガペーでありエロス（性愛）もフィレオ（友愛）も聖化されるということです。それは信仰であり、日ごとの従順であります。ホーリネスは仏教徒のたとえに戻りますが、苦行によるものや自己満足ではありません。ホーリネスは人生そのものを喜ぶものです。ホーリネスの生き方は孔子がもとめた性質が浄化されていくことをもたらすものでありますが、それは自分の努力よりも恵みによってもたらされるものです。

ホーリネスは、自己訓練だけで可能となるものではありません。キリストの聖霊が人間の中で働き、日々人々がそうあるべきであるようにすることです。王路は愛、平和、喜びの道です。それは18世紀の英国のやり方ですが、21世紀の日本においても可能な方法です。

ウェスレアンは、自己の神学が非常に普遍的な可能性をひめていると考えます。「燃えている」「徹底的」と同様に、ウェスレアンは独特の立場に立っているのです。私たちは贖いについては福音的にアプローチしますが、聖書と伝統においては正統主義的です。

同時に、私たちは世に開かれた姿勢を持ち、人生における苦勞に対しても開かれている

---

Oxford U. Press, 1962), 45, 49; Joseph M. Kitagawa, *Religion in Japanese History* (New York: Columbia U. Press, 1966), 159-160; Robert Bellah, *Tokugawa Religion: The Cultural Roots of Modern Japan* (1957; reprint, New York: Free Press, 1985), 98.



ものです。ウェスレアンは、正直に開かれているということを聖書的に与えられる福音の中心におくと信じるものです。それは神が私たちの人間性を一瞬のうちにきよめることを望まれているのです。それは現在可能なことであり、聖霊は男女をこの場において全き者とされるように用いられるのです。

私たちホーリネスの民は様々な世代と文化においてホーリネス教会とは何かということを見出そうとする群れです。各世代は、ホーリネスを再発見し、さらに土着化させ、再受肉化させるのです。多くの課題の中で、西洋人はアジアの人々から連帯と共同体、さらに人間関係における価値という意味について学ぶことができます。これが聖書的なウェスレアンホーリネスの本質的なものです。この受肉の意味がホーリネスの個人主義的で冷淡な概念化から救ってくれるのです。

.ホーリネスの経験は、神の恵みの急進的な楽観主義へと導くものです。私たちが自己中心主義を受け入れるようには、民族中心主義や超国家主義を受け入れることはできません。一人の人間を他の人間から分離しようという障壁には満足できないのです。国家的な教界線は専横的な障壁ではないのです。<sup>\*65</sup>

韓国と北朝鮮の間には壁があり、中国の兄弟姉妹の間にも壁があってお互いを分離しています。目標は、多くの部分はあるけれど、一つのからだになるということです。からだが多くあるというわけではありません。というのも一つのからだのみが主イエス・キリストのからだを完全に反映できるのです。

---

\*65 A point made persuasively by Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, rev. ed. (London: Verso, 1991).